

巻 頭 言

多様性の価値

理事長 佐 藤 薫

新型コロナウイルス感染症はまだ終息の気配がありませんが、ワクチンの開発も進み、ようやく長いトンネルの先を想像できるようになりつつあります。皆様の中には、この困難の中、以前と変わらず前線で頑張っている方もあれば、仕事もプライベートも大きく変わった方もあることと思います。いずれの方々もこれまで常識と考えていたことが、いかに脆いものだったのかを実感していらっしゃるのではないのでしょうか。私の場合は、大学中心で自宅には寝に帰るだけの生活だったのが、滞在時間が逆転しました。新たな仕事のスタイルの確立に時間はかかりましたが、以前より人間的な生活を送っている気がします。たまに学生達と対面で議論すると楽しく、貴重な時間に思えます。感染症の終息後も元の仕事のスタイルに完全に戻る必要はないのではとも考えます。

私たちがこの1年で学んだことは、盤石な常識などというものではなく、自ら考える力と柔軟性が大切であるということではないでしょうか。これは気象学にも当てはまります。気象学は、純粋科学と社会応用の2つの側面を持つ学問ですが、この2つは独立ではありません。純粋科学の探求の成果が予報精度の向上に結びつくことや、気象・気候予測の研究の過程で新たな純粋科学の課題が見つかることもまれではありません。このような特徴を持つ気象学を持続的に発展させるにはどうしたら良いのでしょうか？ また、そのような気象学の中であって、どうしたら息の長い研究者になれるのでしょうか？ 私はその鍵の1つに多様性が挙げられると思います。気象のコミュニティ全体に多様性が常に担保されていれば、その時代における純粋科学としての気象学の新たな展望を切り開くこともできるでしょうし、気象学が取り組むべき重要な社会的課題が新たに生じた時にも速やかに対応できるでしょう。

大会のセッション名やキーワードを見ていただくとうまくわかるように、気象学会では実に幅広い分野の研究が

なされています。気象や気候を理解する上でこれらの各分野の研究はいずれも不可欠なものです。しかし、1人の研究者がこれら全てを探索することはできません。いずれの分野も奥深く、理解が深まったと思うと次の課題が出てくるという具合で、何年もかけて取り組むことになるからです。手法についても同様です。観測、データ解析、理論構築、理論解析、モデル開発、モデル利用、データ同化、機械学習、予報技術等、いずれも等しく重要な手法ですが、それぞれ専門性が高いので1人の研究者が全てに取り組むことは難しいでしょう。つまり、コミュニティの多様性というのは、各分野のそれぞれに優れた専門家が複数いて担保できるものなのです。専門が中途半端な研究者が沢山いてもそれは多様性があるとは言いません。一方で、研究者が狭い専門分野の世界に閉じていては、気象学全体としての多様性は発揮されません。大事なことは、大会等を通じて、互いの専門に十分な敬意を払いつつ、分野や世代を超えてとことん議論し、互いの理解を深めることかと思っています。

近年は、研究自体が大型化し、プロジェクトとして進められるものも少なくありません。若手研究者の中には、シニア研究者の推進するプロジェクトにおいて、中心的なメンバーの1人として活躍している方も数多くおられると思います。しかし、その場合でも、自分の専門性を涵養し、議論を通じて様々な価値観を学び、気象学全体の中での自身の立ち位置を確認する時間を大切にしてください。そして、自分の力で考え、悩み、研究することを繰り返せば、いつの間にか、気象学を牽引できる高い専門性を備えた、息の長い研究者の1人になっていた、ということになるのだと思います。これは研究機関に限らず、気象庁や一般企業での仕事にもそのまま当てはまることです。そのような会員が増え、気象学が今後も持続的に発展することを祈念する次第です。